Life & Work
わたしの天職

活版印刷の文化を絶やすことなく

大松初行（おおまつはつゆき）さん（79）
神奈川県・横浜教会

金属でできた活字を組み、塗料（とりょう）をつけて転写する活版（かっぱん）印刷。かつて新聞や書籍など広く商用に使われた。その後、需要は激減したが、近年、文字の風合いに魅力を覚え、名刺や詩集の制作などに利用する人が増えている。

大松初行さんは五十年以上、活版印刷に使う金属活字を作り続けてきた。昨年、横浜市が市民の生活・文化に寄与する優れた技能職者を認定する「横浜マイスター」に選ばれた。「自分は不器用。でも、『今日はうまくできなくても前に進もう』と打ち込んできたら、段々納得のいくもの、満足してもらえるものが作れるようになりました」と話す。

高校を卒業後、故郷の長崎県平戸（ひらど）市を離れ、印刷や活字鋳造（ちゅうぞう）販売を手がける現在の会社に就職。今も週に二日、活字作りに励む。

活字は、鋳造機で三八〇度に熱した液状の金属（鉛（なまり）など）を型に流し込んで製造する。漢字の活字は、正方形の中心にくるように作らなければならない。位置がずれると、活字を組んで印刷したとき、文字列が波打ったり、字間が乱れたりするからだ。アルファベットは独特のバランスが必要で、「漢字よりも難しい」と大松さんは言う。

この日、最初に手がけたのは三号（一辺六ミリ弱の正方形）の「生」の活字。大松さんは鋳造してはルーペと指の感触で出来栄えを確認し、何度も機械の流し込みの位置を調整して完成品を仕上げていく。納得のいくものができると、自然と表情が和（やわ）らいだ。

「すべてのものにいのちがある」。立正佼成会で妻の位江（たかえ）さん（77）と学んだ仏教の教えを大切にしてきた。「鋳造機にもいのちがあるから、その気持ちになって、心の中で対話しながら作ります。すると、活字にも自分の心が現れるんです。それがたまらなく楽しくてね」。

今、講習会を開き、若い世代への技術の継承にも取り組んでいる。活版印刷の文化を後世に残すことが願いだ。

＊立正佼成会経営者サンガネットワーク「六花の会」
https://rikkanokai.jp/community/
８月１日から上記 HP でもこの記事がご覧になれます。

8_P06_Life&Work.indd　全ページ　2023/06/13　12:05